

「文化交流なら反対する人はいません」 「草の根」レベルで相互理解のさらなる深まりを

今年の文化功労者として顕彰された杉

良太郎さんは、歌手・俳優として活躍する一方、ベトナムをはじめアジア各国との国際文化交流や各国での慈善活動・支援事業などにも長年にわたって取り組んできています。1965年にプロ歌手としてデビューする以前から刑務所慰問などを行ってきた杉さんは、歌手・俳優としての芸術よりも社会貢献活動歴が長く、文化功労者の受章も「歌手・俳優」とともに「国際交流」の功績を高く評価されたものです。

文化交流への着目に大きな意義

——文化功労者の受章、おめでとうございます。今回の受章をどのように受け止めます。今回の受章をどのように受け止めていますか。

杉 日本にも年間2000万人を超える外国人旅行者が訪れるような時代になり、改めて、国際貢献や文化交流などを通じて、海外に日本の文化を発信していく重要性に対する関心が際立って高くなってきたのではないのでしょうか。「歌手・俳優・国際交流」という3つの功績を評価して

なものでしたのでしょうか。

杉 海外との交流は、ちょうど45年前に韓国を訪れて、38度線で最前線の兵士を慰問したのが最初です。27歳の時でした。ベトナムでの取り組みは後発で、また28年しか経っていません。当時は、まだ、ドイモイ(刷新)政策が始まったばかりの頃で、ベトナムとの関係構築を目指す各国にとっては、政治的にも経済的にも極めて厳しい状況でした。そういう状況を踏まえ、芸能・文化の交流を通じて風穴を開けたいという思いを強く持っていたのですが、そうした文化交流の重要性については多くの方々が理解されていたものの、実践されるケースは非常に少なかったと記憶しています。

——そうした杉さんの原点とは。

杉 原点と言えるようなものはありません。これという答えの出しようがないというのが正直なところです。それは、もう、ものごころがついた時からそうだったとしか言いようがない。ただ、日本が戦時中にアジアの国々に迷惑をかけたことについて、直接関係のない年齢ではありますけれども、個人的にお詫びをしたいという気持ちが強く、自分が個人でできるのは何かと考えて、動き始めたことが現在も続いているんですね。

政治的や経済的に難しい状況の時でも、文化交流なら反対する人はいません。双方の国の国民同士の間が強くなれば、国のトップが変わったり、国民同士の関係が厳しくなっても、堅い友好関係や友情を維持することができません。不測の事態が生じた時でも、この友好関係や友情が大きな抑止力になるのではないのでしょうか。国民の間での「草の根」レベルの交流が必要であり、相互理解を深めることが重要なんだろうと思います。国と国の関係を強化するためには、その地盤を固めるための文化交流が求められると考えています。

各国事情を理解する海外旅行を

——長年にわたる国際貢献や文化交流の活動も踏まえ、日本人が海外旅行を通じて各国を訪れることの意味合いや意義をどのようにお考えになりますか。

杉 僕が感じているのは、島国で暮らす日本人は「井の中の蛙」なのではないかということです。海外どころか、自分が生まれて育ったところから出たことがなかったり、新幹線にも飛行機にも乗ったことがない人達が、日本国内にどれだけいることかと思えます。日本で生まれ、日本で育ち、日本の状況しか知らない人たちは、日本がどれほど豊かで平和な良い国かということが分かりません。日本から各国へ出かけると、どうしても歴史的な遺産を訪れたり、ブランド商品を買ったりすることが海外旅行だと思わ



「『草の根』レベルの交流が必要」と語る杉さん

ただき、特に、これまであまりなかった国際貢献や文化交流に着目していただいたことに大きな意義があるのではないかと考えています。

——ベトナムをはじめとするアジア各国での国際貢献や文化交流の活動を始められたご自身の思いは、どのよう

特別インタビュー 文化功労者に選ばれた 杉良太郎さん



新曲では「こんな自分がいたのか」と「自分探し」を歌っています

「この列車は□□と△△に停車して、運転していることにも、旅行中に目を向ける必要があるわけですね。」

杉 日本では新幹線に乗る時に、ホームで「何時何分に〇〇行きが出発します」とお知らせがあり、車内に入り込んでからも「この列車は□□と△△に停車して、運転

手と車掌は誰と誰です」と案内が流れた上に、「乗り間違いのないようにしてください」と注意までしてくれれます。フランスのTGVだったら、何番線のホームから列車が出発するかも知れず、車内でも行先すら告げません。自分で全部探して行かなければなりませんから、乗り間違っても自己責任が問われるわけです。

杉さんご自身の異文化体験としては、どのようなことが印象に残っていますか。

杉 ユネスコの仕事をしている時に、トイレがない国にも何回か行きました。トイレがなく、川で用を足している場所すらあります。そういう経験をする時、日本ではどこに行っても清潔なトイレがあり、水洗トイレで飲み水を使っていることに驚かされず。交通機関の時間も正確で、事件が少なくて、人々も優しいとか、自分がどれだけ恵まれた国に住んでいるかということが認識できるようになります。

ですから、より多くの日本人が、買い物や世界遺産を見るだけの海外旅行ではなく、各国の事情をきちんと理解できるような海外旅行をするべきだと思います。そして、日本の文化の素晴らしさへの理解が深まれば、今度は、それを世界に発信したり、各国から日本を訪れる外国人旅行者にも、日本の文化を楽しませてあげたいと思うようになり、相互交流の動きも拡大して

れています。色々な視点で訪問先の国を見ることも大切だと思います。例えば、ヨーロッパの先進国、例えば、フランスなどにしても、あまり新しくホテルを建てたりせず、昔からのものを修繕しながら使ってきています。どれだけ、モノを大切にしているのか。また、水道の水を飲むことができないことが当たり前だったり、自己責任の意識を持たなければ生活できなかったりもします。

いくことになるはずだと考えています。

自分の時間を作る「ひとり旅」

——今年8月には、約1年半ぶりとなるシングル「ひとり旅」がリリースされました。ご自身が作詞を手掛けた新曲に込めた思いなどを聞かせいただけますか。

杉 僕は以前から、「一人しゃぶしゃぶとか、一人焼肉とか、「二人」というのが理解できなかったんです。恥ずかしいというか、手持無沙汰というか、とにかく食べるしかないみたいな感覚が嫌でした。ところが、大阪へ行く新幹線の車中から外を見て、「ひとり旅」というのもいいかなあと感じたんですよ。相手がいると合わせなければならなかったりするけれども、一人だと色々なことを考えられるわけです。どこで列車を

降りてもいいし、ふらふらと歩きながら、自分は何者なんだろうとか、考えたこともないようなことに思いを巡らしたりもできます。そういう自分のために使う時間を作り出せる「ひとり旅」を考えているうちに、色恋や人生を語る内容ではない他愛のない詞が欲しいなと思い始め、今回の新曲の作詞を手掛ける結果となりました。「ひとり旅」のプロモーショントビデオは、10月に千葉県の銚子電鉄で撮影したのですが、新曲発表会も兼ねましたので、「銚子電鉄 始まって以来の人物」と言われるほどの皆さんに集まっていただけでした。「ひとり旅」は、銚子電鉄と三陸鉄道をイメージした曲ですから、是非、ローカル鉄道の雰囲気味わいながらお聞きいただければと思います。

ホーチミンで ジャパン・ベトナム・フェスティバル

ベトナムでは、11月17日にハノイで日越観光協力委員会が開かれ、志村格JATA理事長も出席しました。18日と19日の両日には、ホーチミンでジャパン・ベトナム・フェスティバルが開催され、日本とベトナムの両国から特別大使を委嘱されている杉良太郎さんも参加。西側諸国の歌手として28年前に初めてコンサートを開き、日本語と日本文化を学べる学校を設立するなど日越交流に尽力してきた杉さんは、「卒業生も活躍してくれており、文化の力で絆を強め、ベトナムと日本で平和な時代を築きましょう」と呼びかけています。



ジャパン・ベトナム・フェスティバルで挨拶する杉良太郎さん